

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月20日現在

機関番号：35402
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22520842
 研究課題名（和文） 危機言語・沖縄伊江島方言の文法
 研究課題名（英文） The Grammar of the Endangered Okinawan Iejima Dialect
 研究代表者
 生塩 睦子（OSHIO MUTSUKO）
 広島経済大学・経済学部・名誉教授
 研究者番号：70224227

研究成果の概要（和文）：

この研究の目的は、沖縄伊江島方言文法を分かりやすくまとめて記述することである。今回の研究期間での主な成果は、以下の3点である。①文の基本型を名詞文・形容詞文・動詞文ごとに、叙述文・疑問文・働きかけ文に分けて表の形でまとめて体系的に示した。②文を構成する各成分（主語・述語・補語等）の働きを、日本語と伊江島方言とを対照させて示した。③陳述副詞の使われ方を話し手の意識と表現態度から6類に分けて詳述した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to show clearly the grammar of Okinawan Iejima dialect. This research showed the following results:

①The author described the grammatical structure of declarative, interrogative and other sentences (imperative/prohibition, request/refusal, invitation) in order of predicative nominative, predicate adjective and predicate sentences.

②In regard to each item of the sentences (such as the subject, predicate and complement), these were analyzed by contrasting modern Japanese and Iejima dialect in terms of the different semantic role.

③The author classified the usage of sentential adverb into 6 types in respect to the speaker's consciousness and expressive attitude.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：沖縄伊江島方言・方言文法・基本文型・文構成成分・陳述副詞・形容詞語形変化・方言教育教材・イメージグチかるた

1. 研究開始当初の背景

2009年2月にユネスコが発表した調査結果によると、世界で約2500の言語が消滅の危機にあり、日本の琉球列島の諸方言もその中に含まれている。筆者が伊江島方言研究を開始した1964年、島では標準語励行が推進されていて、家庭でも標準語を話すように指導されていた。中年以上の年齢層では方言も使われていたが、年齢層によって使われる方言にかなりの差が認められ、沖縄諸方言の中でも伊江島方言の消滅が早いのではないかとの予感がした。その後の49年の間に、生活様式の変化とマス・メディアの発達もあって、島の言語生活は標準語主流になってきており、伝統的伊江島方言を理解出来るのは、現在75歳前後以上の方々のみ現状にある。

方言はその土地の日常生活や風俗習慣、また歴史や伝統をも反映した文化遺産である。伊江島では地区ごとに組踊を中心とした伝統芸能を持っていて、毎年順繰りで村民俗芸能発表会が開催されている。しかし、地区によってはこの民俗芸能の継承が危機的状況にある。これを保存・継承させていくためにも、若い世代へ伊江島方言が継承されなければならない。小学校では、地域の方々への応援を得て、方言を取り入れた創作劇や伝統芸能を子どもたちに教え、学年末の学芸会で発表させている。これは方言継承の礎にはなるが、まだまだ不十分である。

次世代への伊江島方言継承のためには、村を挙げてそれぞれの立場で方言の保存・継承のための活動をおこなっていく必要がある。村民全体が標準語での生活になっている現在、伊江島方言を方言保持者から非保持者へ口頭で、絵やビデオ等映像で、パンフレットや小冊子、書物等文字で伝えていく、そういう環境が望まれている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次世代へ伊江島方言の継承・再活性化に役立つ資料を整えることである。すなわち、書籍『沖縄伊江島方言の文法』の編纂と、子どもたち向け・方言を知らない大人たち向けの方言教育教材の作成である。

(1) 『沖縄伊江島方言の文法』の編纂

危機言語の継承と再活性化の方法として、辞書・文法書・方言談話文字化資料、この三つの必要性は言を俟たない。伊江島方言では、筆者が辞書については語彙を体系的にまとめた『沖縄伊江島方言辞典』(索引編別冊)を1999年に発刊し、2009年には増補改訂した『新版沖縄伊江島方言辞典』を刊行している。方言談話文字化資料に関しては、1994年に自然談話文字化資料『伊江島のはなしことば』をCD付きで刊行している。残るは文法書である。

日本語諸方言の中で最も方言文法の研究が進んでいるのは琉球諸方言であると言われていたが、その研究は個々の文法事象に注目した形態論的研究が多い。1地点について総合的記述を目指したのは、金城朝永(1944)『那覇方言概説』、寺師忠夫(1985)『奄美方言、その音韻と文法』、『言語学大辞典』(1992・1993)の名瀬方言・今帰仁方言・首里方言・平良方言・石垣方言・与那国方言についての記述、宮良信詳(1995)『南琉球蠅山方言野文法』、同(2000)『うちな一ぐち講座』、吉屋松金(1999)『実践うちな一ぐち教本』等がある。しかし、これらは、非研究者の標準語話者が方言よる物語を書こうとするとき、手がかりとして使用する文法書としては、かなりわかりにくいように思われる。

次世代への方言継承と普及に役立つ、包括的で体系的な文法書『沖縄伊江島方言の文法』の編纂を急ぎたい。辞典とこの文法書があれば方言文が復元できる、そのような文法書を目指す。

(2) 方言教育教材の作成

子どもから60歳代の大人までが標準語主流の生活をしている現況では、いろいろな手段で伊江島方言に接する機会をできるだけ多く設ける必要がある。

それには、まず方言教育教材を提供することが有効と考える。小学生向けには遊びの要素を取り入れたものが望ましい。小学生向け方言教材は、小学生にとどまらず、全年齢層を交えての遊びや会話につながる。方言を知らない大人向けには、伊江島方言と標準語とを対照させて書かれている「ことわざ集」や「伊江島の民話集」がよい。これを大人が理解し練習して子供たちに聞かせれば、子どもたちは目を輝かせて聞き入ってくれるにちがいない。伊江島方言と標準語とを対照させて書かれている「ことわざ集」や「伊江島の民話集」、簡便な「日常会話集」等の早急な刊行を目指したい。

3. 研究の方法

(1) 『沖縄伊江島方言の文法』の編纂

① 包括的で体系的、かつわかりやすい文法書としてまとめていくために、現代日本語を対象とした文法研究の成果を検討して、文法書全体の構成を考える。主として参考にするものは、大久保忠利(1976)『楽しくわかる日本語文法』、児童言語研究会(1975)『たのしい日本語の文法』、高橋太郎他著(2005)『日本語の文法』である。

文法書記述では、標準語と伊江島方言を対照させ、標準語文から方言文が引き出せるような文法書にする。

② 特定事項ごとにまとめた文法関連の自著論文を整理し統合する。これまでに報告し

た、動詞の活用・アスペクト、述部構造、文末表現、文末詞、代名詞、格助詞・とりたて助詞、助数詞、属性副詞・オノマトペ、立ち上げ詞、挨拶表現、否定の表現、待遇表現について、①の方針に基づいて整理し統合していく。

③ ②の作業を進める中で、多く出てくる資料不足の事項を洗い出して、現地調査を行う。未報告の陳述副詞、形容詞、接続詞については最優先に調査を行い、まとめる。

④ インフォーマントについては、伝統的伊江島方言を聞いて育てておられる75歳前後以上の方々12、3名の方々を対象とする。この方々を地区・年齢を考慮して4グループに分け、同一内容の質問を行う。それによって、島全体・東地区・西地区いずれの事象か、また伝統的事象なのか、変化してきている事象なのかかわかる。

(2) 方言教育教材の作成

① 「伊江島のことわざ」集の作成

ことわざは生活から出てきた知恵なので、子どもに考える力をつけさせる格好の材料である。より適切な「伊江島のことわざ」を子どもたちに提供するために、まず、現在伊江島で使われている、あるいは知られている「ことわざ」をまとめておくことが必要である。

「伊江島のことわざ」をまとめていく便宜として、沖縄言語研究センター研究報告3『那覇の方言』（那覇市方言記録保存調査報告書1）を用い、研究協力者3名の方々（元助役・島袋満英氏、元教育長・新城晃氏、文化財保護委員・知念シゲ氏）とともに調査し、まとめ上げていく。

その後、小学生用教育教材としての「伊江島のことわざ」を精選する。

② 「伊江島の民話」集の作成

子どもたちへの読み聞かせ材料に、伊江島方言による「伊江島の民話」を作成する。この民話集を小学校高学年・中学生、さらには若年層・中年層・老年層の方々も声に出して読んでいただきたい。

底本にするのは、遠藤庄治監修・編集『伊江島の民話』（伊江村教育委員会刊行、調査者：沖縄国際大学学生）である。

見開き左頁に伊江島方言で漢字・平仮名交じりの文章を書き、右頁に伊江島方言文章に対応するように標準語の文章を書く。伊江島方言文章にはアクセント符号を付ける。

③ 「イメージマグチ日常会話集」

挨拶言葉を中心に、日常よく使われる表現を冊子の形で刊行する。

注意すべきは、話し相手の敬意度3段階によって異なる表現をすることをよく理解してもらえらるようなものによることである。日常会話では相手に合った言葉遣いが求めら

れるからである。

敬意度3段階とは、＜同輩や後輩＞＜少し目上の人（親・叔父叔母・島人のあまりつきあいのない年長者等）＞＜目上の人（祖父母、外来の人、島人のうち役場勤めの役職者や教員等＞である。

④ 小学生のための方言教育教材

村内の3小・中学校の校長先生、指導主事、教育委員会担当者と話し合いを持って、適切な方言教育教材を決めて作成していく。

4. 研究成果

(1) 『沖縄伊江島方言の文法』の編纂

① 現代日本語を対象とした文法研究の成果を検討し、文法書全体の構成を考えた結果、最初の章は基本文の提示と文の構造を示すことと決め、第1章の記述を行った。

文の基本的な型を、まず述語となる言葉の品詞分けから、名詞文・形容詞文・動詞文の順に、その各々を文の内容から述べ立てる文・尋ねる文・働きかける文に分けて、標準語と伊江島方言とが対照できるように表示した。＜述べ立てる文＞と＜尋ねる文＞の表示分類項目は、丁寧さ（普通体・丁寧体）、テンス（非過去形・過去形）、認め方（肯定形・否定形）である。

＜尋ねる文＞の丁寧体については、相手側のこと以外を相手側に尋ねる場合（一般的なことや第三者・自分側のことを尋ねる場合）と、相手側のことを相手自身に尋ねる場合とに分けて、その各々を話し相手に対する敬意の度合いから、＜敬意度1＞と＜敬意度2＞に分けて表示した。

丁寧体で使われる相手側のこと以外を尋ねる場合の敬意度1の言い方は、原則として普通体の言い方と同じである。敬語の形式を用いないで、語調が穏やかな終助詞「カヤ」を使って表現する。一方、相手側のことを相手自身に尋ねる言い方は、敬意度1専用の敬語形式が使われる。

＜働きかける文＞は動詞文だけにある表現である。言いつける文（命令・禁止）・頼む文（お願い・お断り）・誘いかける文（積極的誘い・消極的誘い）に分けて、その各々について対等以下に対する場合・敬意度1の人に対する場合・敬意度2の人に対する場合の言い方を表示した。

お断りの言い方は目上の話し相手には命令形は使いにくい。敬意度1の人には「フンテイ スイニュツツァ（来ないでいいですよ）」、敬意度2の人には「イメンショランテイ スイニャビツツァ（おいでにならなくてよろしいですよ）」の形式が使われる。

文の組み立てについては、文の成分を主語・述語・補語・状況語・修飾語・規定語・独立語とした。これらの成分が、どの部分を指すものであるかが分かるように、標準語と

伊江島方言を対照させた短い文章を使って明示した。主要な成分(補語・状況語)の記述にあたっては、まず、意味役割別にどの格助詞が使われるのかの一覧を標準語と伊江島方言を対照させて表示した。

他の沖縄諸方言と比べて特徴的な点は、音韻変化が文法に影響するという点である。主語は格助詞「ガ」と「ヌ」、とりたて助詞「ヤ」で表される。主語に使われる「ガ」と「ヌ」は、直前にくる名詞によって決まる。その名詞が代名詞(敬い度2の「ウンジュ・ウマ」を除く)・人名・親族名称のときには「ガ」が付くが、前接する母音に「ガ」の子音が融合変化するという伊江島方言独特の音韻変化により、「ガ」は顕在化しない。このことは、伊江島方言話者に他の沖縄諸方言と違う点としてよく認識されている。

② 陳述副詞の基本的な使われ方を、話し手の意識と表現態度から6類<強く願う態度・強く打ち消す態度、推量する態度、質問する態度、強い主張を示す態度、仮定条件を示す態度>に分けて記述した。6類いずれも、どの陳述副詞がどのように使われるのかがわかるように、陳述副詞と呼応する述語例を左右に並べ、標準語と伊江島方言を上下に並べて表にしたものを先に出して、次に項目ごとに詳述していった。

以下、6類のうち<強く打ち消す態度>の陳述副詞について述べる。

打ち消す態度を表す陳述副詞を、動作や状態そのものに注目する動作限定と、動作や状態の程度に注目する程度限定に分けて述べる。両者とも全否定のものと部分否定のものがある。

動作限定の全否定を表す方言「イチャーシ、ゾ(一)イ、イチャン、イチャンカン」

動作を全面的に否定する意志を強調するときに用いる「決して、絶対」には、「イチャーシ、ゾ(一)イ」を使い、今後その動作が行われないことを強調する「もう」には「ツニャ」を使う。これらの副詞には述語動詞否定形と呼応させる。また、「イチャーシ」は述語に可能動詞と呼応させて全面的に不可能である意にも使う。不可能の意味を導く「とても、どうても」に対応する方言「ゾ(一)イ」と、「どうにも」に対応する「イチャン」は、述語を可能動詞の否定形または反語表現と呼応する。

動作限定の部分否定を表す方言「ハナラ(一)ズイ、シーティ、ヌーヤラ、ヌーガナ」

動作を部分的に否定する代表格の「必ずしも」に対応する当方言は「ハナラ(一)ズイ」である。標準語の「必ずしも」は部分否定専用の語であるが、当方言の「ハナラ(一)ズイ」は「必ず」と「必ずしも」両方に使える。「あえて、しいて」に対応する「シーティ」は、述語に否定の意を表す表現を伴って、とりた

ててどうこうする必要や価値がない、の意を表す。よくわからない、はっきりしないの意で使われる。「どうも」に対応する当方言は「ヌーヤラ、ヌーガナ」で、後に打ち消しの語を伴って使う。「ヌーヤラ」は気持ちや考えごとの時などに、「ヌーガナ」は手仕事など実作業がうまくいかない時に使われる。

程度限定の全否定を表す方言「マルディ、ムサットウ、フーターミン、フーターマン、オッピン、ストウン、ヌン」

これらは標準語の「全然、まったく、一向に、少しも、ちっとも、何も」に対応する。これらの語は、述語に否定形と呼応させて完全な否定を強調する。各語は伝えたい内容によって使い分けがある。「マルディ」が一番汎用される。「ムサットウ、フーターマン」は、現在中年層以下ではほとんど使われていない。

程度限定の部分否定を表す方言「ドック、ナンズ、アンシ、アイケシ、アイケナ、アイケナシ」

これらは標準語の「あまり、たいして、そう、それほど、そんなに」に対応する。これらの語は、述語に否定形と呼応させて部分的に否定し、特にとりたてて言うほどでもないの意を表す。「ドック」が最もよく使われる。

「ナンズ」は中年層以下ではほとんど使われていない。「ア」で始まる語の中では、「アイケナシ」が一番穏やかな言い方で、相手に配慮が必要な場合に使う。

③ 形容詞(イ形容詞・ナ形容詞)の語形変化を、工藤真由美編(2007)『日本語形容詞の文法』に掲載の「第1章 調査と研究成果の概要」を手掛かりにして調査を行い、イ形容詞については普通体の肯定形と否定形、丁寧体の肯定形と不定形とを4つの表にまとめることができた。

工藤氏の統一調査では、「赤い」の文例で行うようになっていたが、「赤い」では<相手側の状態>を質問する文例が作りにくいので、「高い」の文例で調査した。

<物・事の状態>の肯否質問形は、相手が敬い度1の人なら「デーヤ タカサアッカヤ(値段が高いですか)」、敬い度2の人なら「デーヤ タカサアヤビミ(値段は高うございますか)」となる。一方、<相手側の状態>の肯否質問形は、相手が敬い度1の人なら「ウガ ヤクメー タキヤ タカサアエミ(あなたの兄さんは、背は高いですか)」、敬い度2の人なら「ウマヌ ヤクメー タキヤ タカサアンシェミ(あなたのお兄様は、背は高くていらっしゃいますか)」となる。このように丁寧体の質問形は、<物・事の状態>と<相手側の状態>を区別できる文例で調査する必要がある。

ナ形容詞は、他の沖縄諸方言同様に所属語彙が多くなく、実際の会話でも使用例が少な

い。「デージナ (大変な)」の文例で一度調査したが、再度の調査が必要である。

(2) 方言教育教材の作成

①「伊江島のことわざ」集の作成

この作業のために、「那覇のことわざ」563項目 (沖縄言語研究センター研究報告 3『那覇の方言』に掲載) に対して、「伊江島のことわざ」が記入できる専用の調査票 (B4 版 40 ページ) を作成し 1 項目ずつ記入することから始めた。第 1 次作業で、関連する伊江島独特のことわざも収集でき、第 1 次の「伊江島のことわざ」(慣用句も含む) をノミネートし終えた。

次に、『伊江村史』の「俚諺」に記載されていないながら、上記のものに入っていない 18 項目の「伊江島のことわざ」を研究協力者 3 名の方々に調査していただき、9 のことわざを第 1 次資料に加えることとした。

さらに、先人の遺著の永山政良著『伊江嶋俚諺大全』と伊是名牛助著『伊江島考察史』の中のことわざが現在も使われている、知られていると判定できた 21 のことわざも、第 1 次資料に加えた。

以上「伊江島のことわざ」として認定したのものについて、音声記号表記、直訳、解説を記述してきている。また、利用者の利便性を考えて、同じ意味で異なった表現の伊江島のことわざ・那覇のことわざ・日本のことわざも併記しておくこととした。

以上の作業を研究協力者とインフォーマントの方々のご協力を得てまとめてきており、現在、6 割程度の完成度にまで至っている。

②『伊江島の民話 第 1 集』の作成

この民話集は毎年 1 集ずつ、第 10 集までの刊行を目的にしているが、その第 1 集の 5 話「山ぬ木守らたる神様」「安里五郎ぬ角力取り話」「マーガぬ由来」「綱越ーしえ」「昔ぬ笑い話」は、いずれも本文 (伊江島方言文とそれに対応する標準語文、表紙絵と挿絵入り) 編纂は終了した。また IC レコーダーへの吹込みも 5 話すべて終わった。原稿は印刷所に渡し、現在、校正中である。

③「イージマグチ日常会話集」の作成

10 年前に挨拶言葉を中心に日常よく使われる表現を収集していたが、その草稿をインフォーマントの方々にご確認の調査を行った。このたびの調査では、全体量の 3 割程度しか確認できなかったため、草稿すべてを再調査して不足部分を補った上で、「イージマグチ日常会話集」として精選したものを冊子にまとめる予定である。

④小学生のための方言教育教材

村内の 2 小学校の校長先生、指導主事、教育委員会担当者との話し合いの中で、校長先生から伊江島方言による「かるた」と「五十音表」がほしいとの要望が出たので作成し

た。

「イージマグチかるた」は平成 22 年 7 月からいつものインフォーマントの方々に加え他長老の方々のご助力も得て、その年の暮れには試作品ができた。その後改良を重ね、読み手 CD も完成して平成 24 年 4 月に完成した。かるたは村内の各学校や保育所に配付され、活用されている。6 月には一般販売も始まり、村内はもとより島を離れた方々からも購入が相次ぎ、第 1 版が売り切れたので 9 月に増刷された。

「いーじまぐち五十音表」は平成 24 年 3 月の話し合い (前掲) で校長先生から、かるたは「伊江島方言文」なので学校低学年には難しい、「伊江島方言の単語」による五十音表が欲しい、のご発言から作成が決まった。4 月から研究協力者 3 名の方と単語選びが始まり、6 月末には原案ができた。この原案を教育的見地から校長先生のご意見をいただき、協力者 3 名の方々の伊江島方言として残したい、という意見を入れながら語選定をした。絵は村出身の画家の方にお願ひし、9 月印刷所に入稿した。平成 25 年 2 月に A2 版の「いーじまぐち五十音表」ポスターが完成し、4 月、全児童生徒に配付された。3 月から希望者にも販売されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 0 件)

〔学会発表〕 (計 2 件)

(1) 生塩睦子「伊江島方言の陳述副詞」沖縄言語研究センター、2011 年 11 月 19 日

(2) 生塩睦子「沖縄伊江島方言の文法ーわかかってもらえる文法書を目指してー」沖縄言語研究センター、2013 年 1 月 12 日

〔図書〕 (計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

刊行物

(1) 生塩睦子方言監修「イージマグチかるた」(読み手 CD 付き)、伊江村教育委員会、2012 年 4 月刊行

(2) 生塩睦子監修「いーじまぐち五十音表」(A2 版)、伊江村教育委員会、2013 年 2 月刊行

新聞掲載

(3) 記事「方言継承楽しんで イージマグチかるた、長老から聞き取り作製」琉球新報、2011 年 3 月 13 日付朝刊

注記) 試作段階のイージマグチかるたを使って、伊江中学校 1 年生と保護者が同行体育館で行われた学年レクで楽しんだことの記事。

(4) 記事『「イージマグチかるた」完成、遊びながら文化継承」琉球新報、2012 年 5 月 23 日付朝刊

(5) 記事「伊江島方言かるた CD も製作」、沖縄タイムス、2012 年 5 月 26 日付朝刊

(6) 記事「伊江言葉で五十音表 全児童生徒に配布へ」、琉球新報、2013 年 2 月 24 日付朝刊

(7) 記事「伊江島の方言で五十音表 全児童に配布へ」、沖縄タイムス、2012 年 3 月 7 日付朝刊

(8) 記事「伊江島方言で五十音表 全児童に配布へ 沖縄」、朝日新聞デジタル、2013 年 3 月 8 日付

6. 研究組織

(1) 研究代表者

生塩睦子 (OSHIO MUTSUKO)

広島経済大学・経済学部・名誉教授

研究者番号：70224227

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：